研究課題	鯖江市デジタルパンフレット
副題	～地域を教材とした研究活動で深く地域と結びつく～
キーワード	地域学習　思考力･判断力･表現力　ICT活用　教科横断型学習
学校名	**福井県立鯖江高等学校**
所在地	〒916-8510 福井県鯖江市舟津町２丁目５－42
ホームページアドレス	http://www.sabae-h.ed.jp/

１．研究の背景

本校は１学年５クラスの普通科高校である。就職から大学進学まで幅広い進路を希望する生徒がおり、部活動にも力を入れている。生徒たちは学習に対してどちらかというと受け身であり、教師から言われたことはするが、自ら学ぶという学習意欲が高い生徒は少数である。本校の学習の内容はどの教科も基礎基本に重点を置いており、生徒が主体的に学ぶ環境をつくることに教員は消極的であった。総合学習もどちらかというと教科指導に近いことを行っていた。

こういった状況を大きく変えるために行った地域探究活動が「鯖江市デジタルパンフレット」作成である。本校で地域資源を活かした地域学習活動を行おうと考えた。

具体的には各教科で鯖江市を題材として生徒が「鯖江市を紹介する」研究をし、研究内容をデジタル化してパンフレットを作成するという学習である。フィールドワークで地域を撮影する、英語版を吹き込む、you tube とリンクするなど生徒は ICT の魅力を存分に活用した研究を行った。生徒が主体的に学ぶことで生徒が地域を愛し、学ぶ喜びを伝えたい、そして成果物を作ることで生徒と教員が達成感を味わいたいと考えた。

２．研究の目的

・中教審がこれからの社会に対応するために必要であるとする学力の三要素のうち、特に「思考力・表現力・判断力」を ICT 活用を通して育成するため。
・新学習指導要領が目指す教科横断型の学習を総合学習も含めて広く展開するため。
・教員がチームとして連携しながら学力向上のための授業改善に取り組むため。
・地元鯖江市と連携しての学習を通し、地域を愛し地域への貢献意欲を持つ地域市民を育成するため。

３．研究の経過

まず前年度２月からデジタルパンフレット作成において校内研修会を開き、市役所と協議を行い、方向性を定めた。４月に校内でコンセンサスを得て、１学期中はＩＣＴ教材を活用しながら各教科で研究活動を行う。研究した内容を紙媒体でまとめ、夏休みに生徒はフィールドワークを行った。２学期に研究内容をデジタル化し、３学期に英語版が完成するという流れである。

実際の大まかな内容の検討・計画は校内研修委員会を定期的に開いて行う。その検討内容を各教科会や学年会で協議したうえで実施していくことになった。表１は主なものである。

表１　平成 30 年度　鯖江市デジタルパンフレット　研究の経過

時期	取り組み内容	
H30　2 月	校内研修委員会にて来年度のデジタルパンフレットの取り組み・方向性を検討　市役所との協議	教員アンケート
4 月	校内研修委員会にてデジタルパンフレットの内容を確認。職員会議にて今年度各教科、各学年、各部活動でコンセンサスを得る。評価検討。ポートフォリオ活用方法検討。	生徒振り返り用紙 生徒アンケート
7 月	校内研修委員会で職員研修まとめ。夏休みの課題の決定と発表方針の検討。評価検討。2 学期の内容と方法検討。	アドバイスまとめ 教員の相互評価
8 月	長期休業を活用し、生徒はフィールドワークを行う。 夏休みの課題の世界について検討・分析。 発表方法検討。	生徒感想　実施担当者の観察・意見 夏休み課題の成果
10 月	校内研修委員会にてデジタルパンフレット英語版について検討。今年度の課題検討。	教員アンケート 生徒感想
11 月	福井県内の新聞部の生徒と本校生徒が鯖江市内をフィールドワークし、鯖江地域新聞を作成。	地域新聞　新聞社・有識者からのアドバイス
1～2 月	デジタルパンフレット英語版作成。評価検討。 次年度の組織、研究内容検討。	生徒自己評価

４．代表的な実践

（1）地域と協働した学習活動

本校の研究活動では鯖江市と提携することで多くの協力をしていただいた。例えば著作権、文化施設の公開などである。特に人材の提供という面では多くの協力を得られた。総合学習では地域の大学生が協働して研究活動を行った。総合学習のプレゼンテーションでは地域のＮＰＯ団体である鯖江市まちづくり応援団に講評していただき、研究活動が活発化した。

図１　市長との連携

図２　地元学生との協働

図３　市民団体の協力

（2）ＩＣＴを活用しフィールドワークを重視した研究

本校はフィールドワークを重視した研究を行っている。地域の人にインタビューしたり、写真や動画を撮影したり実際に体験することを大切にした。貴財団からの助成金で購入したタブレット端末はこういった地域学習に非常に効果的な教材である。

図４　古墳での研究　　図５　地域の寺院での研究　　図６　タブレットの活用

（3）教科の枠・学校の枠を超えて協働した地域教育

もう一つは新聞部の活動である。デジタルパンフレットのさらなる発展の方法として、福井県内の新聞部と本校有志の生徒が鯖江市内を探索し、地域の魅力を見つけ出して鯖江市の地域新聞を作成したことである。フィールドワークを存分に行い、本校生徒と鯖江市のガイドが鯖江市を案内して探索した内容を新聞社の協力を受けながら新聞を作成し、デジタルパンフレットに掲載した。他校との協働・教科の枠を超えた部活動での取り組み・地域と連携した深い学びなど、デジタルパンフレットの可能性をさらに広げることができた。

図７　鯖江市内のフィールドワークを行い、デジタルパンフレットのもとになる研究を行う。

５．研究の成果

（１）教科横断学習で生徒の「思考力・表現力・判断力」を ICT 教材を活用して育成。

代表的な研究の成果として、算額の研究が挙げられる。算額とは江戸時代に算数の問題の解を額に納めたもので、鯖江市は藩の学問として算額を推奨しており、市内の神社に多く奉納されていることで有名である。日本史の授業で算額と鯖江の関わりについて研究し、古典と数学を組み合わせた授業の中で算額に書かれてある文章を口語訳したり、昔の単位を現代の単位に直したりして（合・斗をリットルに置き換えるなど）書かれて

ある問題を解く。また、それをわかりやすく図や計算式で表した。情報の授業ではデジタルパンフレットとして観光客でもわかりやすいようにレイアウトし、英語の授業では自分たちが解いた算額の内容を外国の観光客にわかりやすく英語版を作成した。算額という題材をもとに様々な教科に渡って、時には古典と数学を同じ授業で行うことで生徒たちは研究を行った。

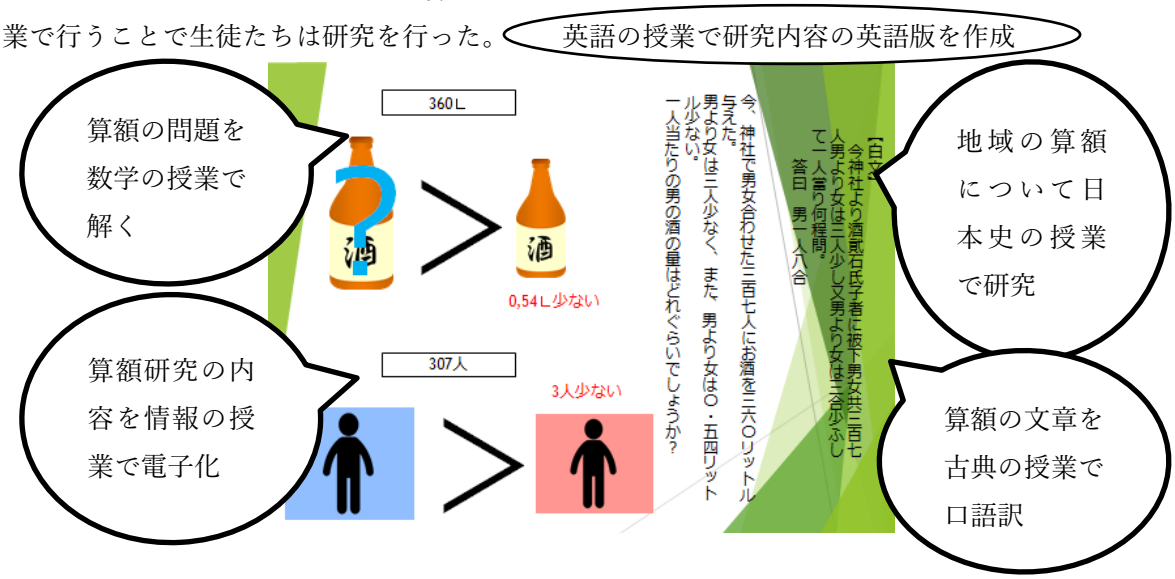

図８　教科を横断して探究し、作成されたデジタルパンフレットの１ページ

（２）教員がチームとして連携しながら学力向上のための授業改善

教員の指導力向上の言う目的に関して、Ｑ１，Ｑ２のアンケート結果をごらんいただきたい。これは本校が行っているアンケート結果である。昨年と比べて生徒で話し合う活動や内容を考える時間がそれぞれの教科で増加している様子が分かる。これはデジタルパンフレットの地域研究を通じて教員たちが教科を横断して検討会を開き、授業改善を行うことで、生徒が主体的に学ぶ環境を整えられてきていることがわかる。

（３）地域を愛し地域への貢献意欲を持つ地域市民を育成

次の成果として生徒がボランティア活動や地域まちづくりコンテストなどのプランコンテストへの参加率が飛躍的に向上したことがある。**H29 年のボランティア及び体験学習会の参加は 569 名。これがH30 年には 1113 名と倍増している。**

顕著な例として図９は鯖江市地域活性化プランコンテスト。東京大学や京都大学の学生と高校生が地域活性化についてプランを立てるものであるが、14 名の生徒が参加し、最優秀賞を獲得。図１０は大野市観光プロデュースコンテスト。こちらも本校生徒が参加し優秀賞。図１１の花のまちづくりコンテストは市長賞（最優秀賞）と、めざましい活躍を見せた。もちろんすべて今年初参加である。こういった活動に生徒達が参加するだけでも劇的な変化である。それ以上に好奇心を持ち学びに積極的になって、すばらしい成果を上げることができた。

地域を愛し、貢献意欲を持つ地域市民の育成という研究目的の成果といえる。

Ｑ１生徒間で話し合う活動をよく行っていると思いますか。（生徒アンケート）

	英語	数学	国語	地理歴史	理科
H29	68.1%	45.3%	51.1%	47.5%	32.6%
H30	**72.4%**	**57.9%**	**60.1%**	**73.0%**	**45.6%**

Ｑ２板書をノートに書くだけでなく内容を考える時間が十分ありますか。（生徒アンケート）

	英語	数学	国語	地理歴史	理科
H29	66.0%	46.4%	60.6%	47.5%	37.1%
H30	**69.5%**	**55.5%**	**66.9%**	**56.4%**	**38.0%**

図９　地域活性化コンテスト

図 10　観光プランコンテスト

図 11　花のまちづくりコンテスト

６．今後の課題・展望

デジタルパンフレットを「つくる」から「つかう」に

デジタルパンフレットはつくることだけを目的とするのではなく、研究した内容を広く観光客や地域市民に公開することを目的として研究している。今年度はデジタルパンフレットを作成することに主眼を置いたが、例えば今年度福井国体の会場であったサンドームで観光客向けに本校生徒がプレゼンテーションを行った。市と協力してスクリーンに映しプレゼンテーションしたり、生徒たちはタブレットを持って、観光客に見てもらおうと声かけしたりした。観光客はデジタルパンフレットのプレゼンテーションを見るために会場に来たわけではないため、なかなか注目していただけなかった。しかしそのことが逆に、生徒たちが「どのようにしたら観光客に見てもらえるのか」考えるきっかけになった。研究のための研究ではなく、あくまで観光客に鯖江市の魅力を伝えるための研究である。

今年度はこのほかにも市長や県内の研究会でもプレゼンテーションしたが、来年度以降は市内の小中学校、地域の文化施設など広く公開することで地域貢献し、生徒の学習意欲向上を図ることが今後の課題であり、展望となる。

図 12　国体会場サンドームにて生徒が観光客に研究内容をプレゼンテーションしている様子

図 13　市長へのプレゼンテーション

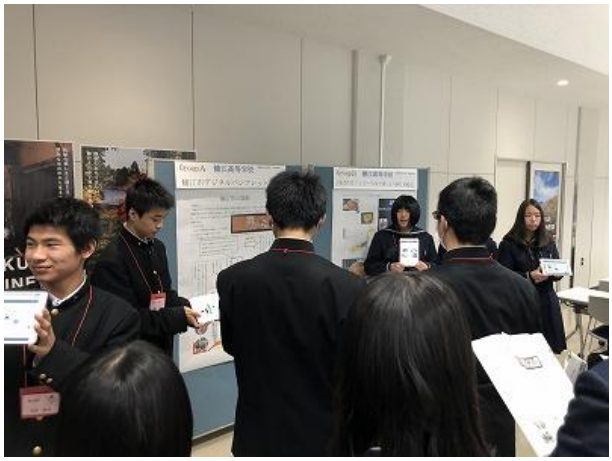

図 14　研究会でのプレゼンテーション

7．おわりに

本研究を行うことで教員団が劇的に変化し、地域に広く学校や生徒の研究を公開することができた。全クラス、全生徒で行う総合学習を公開したことや保護者参観の授業を探究活動にし、生徒が生き生きと学ぶ姿を見ていただけたこと、地域の市民団体に研究内容をプレゼンテーションしたこと。これらは今までの本校では考えられないことである。

これだけの研究に協力いただいた市長はじめ市役所の皆様、数多くの鯖江市の市民団体、本研究を支えていただいた貴財団の研究助成に学校関係者一同、心より感謝致します。また研究にあたって、本校の取り組みを評価していただき、地域にデジタルパンフレットをプレゼンテーションすることを提案していただきました北澤武教授（東京学芸大学）に感謝致します。

8．参考文献

・秋田 喜代美（2018）『福井発　プロジェクト型学習』，福井大学教育学部附属義務教育学校研究会
・経済産業省(2010)『社会人基礎力　育成の手引き』　学校法人河合塾
・藤吉雅春(2015)『福井モデル 未来は地方から始まる』　文春文庫